
ライフイズユアセルフ ~ホワイトクリスマス編~

妻久詠透

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライフイズユアセルフ ～ホワイトクリスマス編～

【Nコード】

N6886Z

【作者名】

妻久詠透

【あらすじ】

クリスマススイブ前日。札幌にあるとある喫茶店に、思わぬ来客者が訪れる。

「サンタを止めなければ、世界が滅亡する」

警告を発した本人は、赤い服に白いひげ。

果たして、世界は無事クリスマスを迎えられるのか。

ホワイトクリスマス編 1 (前書き)

自分のサイトに掲載していますが、多少改変してこちらに掲載させていただきます。

ホワイトクリスマス編 1

「クリスマスが今年もやってくる〜」

聞いたこともないような音程の歌を、透明なグラスを白い布で丁寧に拭きながら、マスターは陽気に歌っていた。

いつも通り白いワイシャツ、黒に紫のストライプが入ったネクタイ。そして黒いエプロンを着けているマスターは、なんだかいつもよりも御機嫌だった。

俺はというと、この人気のない喫茶店で、唯一のメニューであるミルクティーを飲みながら、まったりとした時間を過ごしている。

時刻は6時過ぎ。外は粉雪が降る、クリスマスシーズン真つただ中と言える雰囲気だ。どつから収入を得ているのかよく知らないが、この喫茶店も外にクリスマスツリーを飾っており、店の看板にもイルミネーションが施されていたりした。

20日を過ぎてからというもの、やけにマスターのテンションが高い。どうやら、クリスマスが相当好きらしい。

「明日はクリスマスイヴですね。悠一は、夢奈とデートする予定とかないんですか？」

「何言つてんだ。あいつとデートするくらいなら、見知らぬおっさんと居酒屋で飲み明かした方が有意義だ」

「素直じゃないですね〜。クリスマスが今年もやってくる〜！」

笑みを浮かべながら陽気に歌を歌う。先程とはまた違った音程が奇抜に上下する歌を耳に入れながら、俺は美味しくも温かいミルクティーの入ったティーカップに口をつける。

「そういえば悠一。今年はサンタさんにどんなクリスマスプレゼントをお願ひするんですか？」

マスターは拭き終ったグラスを棚に戻すと、俺にそんなことを聞

いてきた。

「何言つてんだ。俺はもう中学2年だぞ？サンタなんか信じているわけないじゃないか」

口をとがらせながらマスターに返答したが、俺はふと心の中で、本物のサンタが実は居るのではないかと思った。

そう思った理由は勿論、目の前にマスターというヴァンパイアの人間の混種が居て、なおかつ俺が今年見て来た色々な異形の者たちを未だ記憶しているからである。

読者諸君はよくわからんだろうが、この世には本当に“その類”の者たちが存在する。俺だって信じちゃいなかったけどな……。

そもそも、中学2年である俺に対して、サンタに何をお願いするのかと尋ねる大人はそう居ない。マスターは本当にサンタが居るから、俺にプレゼントに関する質問をしたに違いない。

「悠一、サンタさんは本当に居るのですよ？」

ほら……。

「私がサンタさんは本当に居るのですよ？って言う前に、心の中で実はサンタさんて本当に居るんだなって思ったでしょう？」

うお……そこまで読まれたか……。

「サンタさんは、子供達にプレゼントを配るために、必死で準備をしているのですよ？年に一度しか働かないわけじゃありません。クリスマスという日のために、サンタさんは懸命に働いてくれているのです」

グリーンランドから世界中の子ども達へプレゼントを届ける爺さんのことを、世の子供達の大半は父親であると思っている。否、サンタ等という赤服の爺さんはこの世に存在しないと信じているはずだ。

勿論、例えそれが幻想なんかであっても、俺は気にしちやいなかった。

そもそもクリスマスは、クリスマスとしての雰囲気味わえれば

それで十分で、プレゼントはともかく、サンタの有無なんかにはまったく興味がなかった。

父親が「ほら、サンタさん今飛んでいったよ」と、居もしないサンタの存在に目を輝かせ、朝の粉雪が降る空を眺めていたのは、恥ずかしくも楽しい思い出の一つだ。

「伝承や物語としてサンタクロースの話は語り継がれています。この世は魔の類を拒絶する世界ですから、サンタのような親しまれている魔法使いも、本当に実在すると世に知られることはないでしょう」

「さらった言っただけど、サンタって魔法使いだったんだな」

俺は驚きもせず、漂々とした顔でマスターにそう言った。

「ええ。魔法を使って世界中の子供達にプレゼントを渡すのです。

トナカイが空を飛ぶ仕様ではなくて、サンタさんの魔法によってトナカイとソリは浮かんでいるのですよ」

「こりゃ新説だ……。今までサンタが魔法使いだなんて説いた大人はそう居ないはずだ。

「魔法を使って空を飛び、人々の願いを叶えながらサンタは世界中を回ります。煙突から一々家に入ってプレゼントを置いては埒があかないですからね」

子供の夢を壊すようなことを平然と言ってくれるじゃないか。

「空を飛んでいる時に魔力が尽きて、煙突にサンタさんが落っこした時があったそうです。それがきっかけで、サンタさんが家に入る時は煙突っていう話が広まったんですよ」

にこやかな笑みを浮かべながらマスターは言うが、俺はその話があたりの作り話にしか聴こえない。

マグカップに入ったミルクティーの最後の一口を飲み干そうとした時、店の天井に何か大きな岩でも落ちて来たような大きな音が鳴った。びっくりして手に持っているマグカップを落としそうになった。

マスターはカウンターから店の入り口へと向かい、扉をゆっくり

と開いてみた。

外は綺麗な粉雪が降っている。店の街灯で照らされていて、なお綺麗に映る。

マスターは店の外に顔を出し、辺りをきよろきよろと見回す。すると、一点を見つめて動かなくなった。

「マスター、なんかあったのか？」

俺は店の入り口に居るマスターに声を掛けたが、マスターは一切返答しなかった。呆然と立ち尽くしているままだ。

店の外から、か細い老人の声が聴こえてくる。

「お願いだ……助けてくれ……」

懇願する者の正体が一体何者なのか確かめようと、俺は席を立ち店の入り口へと歩み寄った。そして、マスターと同じく呆然と立ち尽くした。

ホワイトクリスマス編 1 (後書き)

クリスマスが過ぎる前に、この小説を全てアップできますよーに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6886z/>

ライフイズユアセルフ ~ホワイトクリスマス編~

2011年12月23日01時49分発行